

稚内北星学園大学 2018 年度入学式・式辞

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。稚内北星学園大学を代表して、みなさんを歓迎し、入学をお祝いいたします。新入生のご家族、関係者のみなさまにも心からお喜びを申し上げます。

また、お忙しい中、稚内市長をはじめ多くのご来賓の方々に臨席をいただきました。誠にありがとうございます。

学校法人・稚内北星学園は「宗谷の地に高等教育機関を」という地域の熱意で設立され、1987年に短期大学としてスタートしました。2000年には四年制大学に改組され、日本で初の「情報メディア学部」を設置し、現在に至っています。

この情報メディア学部で、みなさんはどのようなことを学ぶのか、ここで改めて確認したいと思います。

あるツイートに「入社した頃は上司のおじさん相手にパソコンの使い方をあれこれ教えていた。それがいま上司の年齢になったら、今度は逆に新入社員にパソコンの使い方を教える羽目になっている。」とありました。

こうした事態は実は、いま必ずしも珍しいことではないらしいのです。大学生の場合、ほぼ全員がスマホを持っているのに対し、自分専用のPCを所有しているのは7割にとどまります。そうした状況を反映して、キーボードに慣れていなくて、スマホのフリック入力の方がずっと早いという若者、あるいは、ワードやエクセルをほとんど使えない新社会人が現れているのだそうです。

しかしやはり仕事の場でのベースは、当面はPCだと思われます。キーボードとPC用のソフトウェアに関するスキルは、ビジネスパーソンにとって相変わらず必須のものであるはずですが。スマホは基本的に、情報あるいはコンテンツの“消費”には便利ですが、その“生産”にはあまり向いていないからです。

本学に入学されたみなさんは、当然、イヤでもPCの操作に習熟することになります。プログラミングやネットワークの学習ではキーボードを使わないわけにはいきませんし、ビジネスソフトも、スマホで本格的に使いこなすことはできません。インターネットを活用して必要な情報・正しい情報を発見し、適切な形に整理したり表現したりする作業にも、PCの方が適しています。

稚内北星学園大学に入学した以上、デジタルカメラ、ビデオなどの周辺機器の使い方も含め、情報メディアを取り扱う基礎的なスキル全般を、全員が身に付けることとなります。

そしてもちろん、みなさんがこれから本学で学ぶのは“情報メディアのハードやソフトの取り扱い方”にとどまるものではありません。

かつて、イギリスに T.S.エリオットという詩人がいました。その人の作品の中に、次のような一節があります。

知識の中に失われた知恵はどこにあるのか？

情報の中に失われた知識はどこにあるのか？

知恵と知識と情報。

知恵が消えて知識が残り、さらに知識が消えて情報が残るという事態をエリオットは憂えているようですが、この三つはどのように関連し、また違っているのでしょうか。

まず情報と知識との関係ですが、ある人がそれをジグソーパズルのピースと、ピースを組み合わせて完成する一枚の絵に例えていました。パズルのピースの一つひとつが情報だとすると、完成する絵全体が知識だということです。ピース、断片がバラバラに大量にあっても、そこに意味を見出すのは難しいけれども、それらを正しく関連付けることで意味が浮かび上がる。その意味で、知識とは基本的に体系的なものです。

では知識と知恵との関係はどうでしょうか。神戸市の小学校の校長先生が大きな震災のあと、こんな言葉を生徒たちに贈りました。「震災で役立ったのは『知識』ではなくて『知恵』でした。自分で考えて行動する、そんな『知恵』を持った人間になってほしい。」——知識が必要ないということではないはずですが、ただ、その知識を生活に、生きることに役立てる力、それが知恵なのだという風に理解できると思います。

本学では、情報を自分なりの知識として整理した形で理解できるように学び、さらにその知識を、実践の場で生かすことを通じて、生きる知恵として身に付けられるように学びます。

特に、「知識を地域の実践の場で生かす」という点で、稚内北星学園大学は、全国的にも誇れる実績を積み上げてきました。2014年から5年間のCOC事業、「知（地）の拠点整備事業」の実施校として文部科学省に選定されていますが、その眼目は、「大学が地域課題に取り組むことで学生の成長を促す」ということです。実際多くの学生が、この事業の中で、地域で活躍しながら大いに学びました。

たとえば、数学教員を目指す学生は、稚内市、利尻町、猿払村の子どもたちへの学習支援を行い、貴重な経験を積んできました。小中学生の学力向上という地域の課題に対応し

ながら、実際に“教える”という実践の中で大きな学びを経験したということです。

稚内の年中行事の一つになりそうな勢いのコーヒーフェスティバルにおいては、地域と連携しながら、企画立案から営業、広報、会計、そして当日のイベント運営までを学生たちが主体的に担い、街のにぎわいを生み出す現実的な力となっています。

映像作品制作による地域情報発信は、毎年複数のコンテストで上位入賞を果たしていますが、そうした成果は、学生たちがこの地域の歴史や文化を学ぶことで適切な課題を設定したから、そして取材や撮影の過程で地域の人々に学んだからこそそのリアリティが評価されているのだと思います。

以上ピックアップしたいずれの事例でも、学生たちは自らの情報や知識を総動員し、そしてそれらに不足があれば自ら調べて補いつつ活動しました。しかもそうした過程を、仲間とのチーム力を発揮しながら、つまり議論と協働を積み重ねながら遂行しました。そうしなければ、課題に対応できないからです。

そうした経験の積み重ねこそが、みなさんに、「知恵」をもたらします。

地域を対象としてはいませんが、課題解決型の学習という機会はほかにもあります。今年の9月に本学で全道大会が開催される「ETロボコン」では、設定されたハードルを乗り越えるために「情報と知識の総動員」を必要とするに違いありません。あるいは、カーリング部の活躍をめざして、その戦略分析にAI、人工知能を活用することなども、実践的な課題として取り組む価値のあるものだと思います。

また、本学の宗谷地域研究所の「鉄道プロジェクト」に取り組んでいるのは、現段階では、本学の教員と地域の有識者ですが、遠からず、学生の皆さんの参画を促します。鉄道の展開を軸に据えながら、地域の歴史と文化と産業を地図上に可視化するというこの研究プロジェクトの活動によっても、情報と知識を総動員したクリエイティブな体験を積むことができはずです。

新入生のみなさん、どうぞ旺盛に学んでください。

情報を知識として整え、知識を生きるための知恵として鍛える、そのように学べるよう、稚内北星学園大学は、全学を挙げてみなさん一人ひとりを支援いたします。そして、地域の方々も、応援してまいります。

みなさんのこれからの大学生活が実り多いものとなりますよう祈念して、私の式辞いたします。

本日は、誠に、おめでとうございます。

2018年4月1日

稚内北星学園大学 学長・斉藤吉広